

特集・タイ法式による得度式

『中外日報』掲載

# タイ国ワット・パクナムの住職を戒師に

横浜・曹洞宗 善光寺の4子息が同時に

南方上座部仏教（テーラワーダ）の国タイから高僧が来日して、日本で曹洞宗の住職の子息四人の得度式を挙行するという日本仏教史上にも前例のない盛儀が二日、横浜市港南区日野町一六〇四の善光寺（黒田武志住職）で厳修された。黒田住職が二十三年前にバンコクの名刹、ワット・パクナムで修行した縁により、同寺住職プラ・タム・パンヤー・ボーディの強い要望のもとに実現したもので、これを記念してワット・パクナムから善光寺に寄贈された金色の仏像一軀の開眼法要も當まれた。

# 史上稀な国外得度

## 黒田住職の大胆な決断

タイから来日した僧は、ワット・パクナムの住職プラ・タム・パンヤー・ボーディと副住職のプラ・パーワナー・コーソン・テーラの両氏、

それに現在、善光寺海外留学僧派遣育英会からの派遣留学僧としてワット・パクナムで修行中の浦田智司（浄土宗）、渋井修（真言宗）の両氏が随身。また世界仏教徒会議（WFB）事務局次長でタイ国日本人会事業部長の小谷亀谷郎氏も同行してきた。

タイ国上座部仏教の僧侶が国外に出て得度式の戒師をつとめるのは、歴史的にも稀有のことといわれ、タイ国の関係者から大きな期待が寄せられていた。日本の仏教界でも異例の得度式のため注目を集め話題を呼んでいる。

黒田住職は「宗祖を通して釈尊に還る」を信念とする人で、横浜・鶴見にある曹洞宗大本山総持寺の特別僧堂での修行を経て、インド仏蹟巡拝の旅に出、さらにタイ国で上座仏教の叢林生活を体験した。その後、アメリカへも渡り、白人社会で曹洞禪の開教師としても二年間過ごした。

帰國後、ゼロから出発して現在の善光寺を新しく開創し、十五年間に本堂・客殿・釈迦殿を相次いで建立、十六年目の昭和五十九年一月に善光寺海外留学僧派遣育英会を設立し、「世界に活眼を開く人材の育成」に尽くしている。善光寺は今年で開創十九年を迎えたばかりだが、檀家数は二千六百戸を超えるという。

自分の四人の子息を一度に南方上座部の伝統に従つて得度させ、テーラワーダの沙弥とする得度式を挙行したのは、黒田住職とワット・パクナムの住職プラ・タム・パンヤー・ボーディ

氏との長年にわたる親交と信頼関係にもとづくものにほかならない。と同時に、因襲やセクショナリズムにとらわれず、仏教の振興と現代社会に果たすべき役割の実践に情熱を燃やす黒田住職ならではの大膽な決断でもあった。

## 寄贈の仏像の開眼法要も

### 4人の子息 小3から高2まで

テーラワーダの得度式は、すべてパーリ語で執り行なわれる。得度式に臨んだ武徳君（十六歳、高二）、泰志君（十三歳、中一）、博志君（十二歳、中一）、賢志君（八歳、小三）の四人は、パーリ語の得度式次第をすべて暗誦し、進退をこなした。

会場となつた釈迦殿は来賓および檀信徒、関係者らで埋まつた。曹洞宗管長専使として神奈川県第二宗務所長・梅田文丈氏が出席、来賓と

して東方学院長・中村元（東大名誉教授）、浄土

宗大本山光明寺法主・藤吉慈海、真言宗増徳院住職・藤井真水、前全日本仏教会事務総長・矢萩信顕、駒沢大学教授・奈良康明、同・鈴木格禪、駒沢女子短期大学学監・東隆真（教授）、正大学教授・宮林昭彦、鶴見大学歯学部事務部長・宮本延雄の各氏、友人の日本パクナム会会長・石附周行（群馬県双林寺住職）、曹洞宗宗議会議員・洞外文隆（神奈川県本瑞寺住職）、関東管区教化センター主監・一適隆信（埼玉県大仏寺住職）、駒沢大学講師・福田孝雄、山形県善宝寺役寮・大八木春邦の各氏ら、また仏師の錦戸新觀氏、日蓮宗の横浜市本乗寺住職・従野公徹氏、黒田住職の兄弟の栃木県宗務所長・黒田俊雄、ロサンゼルス禪センター主管・前角博雄、東京都桐ヶ谷寺住職・黒田純夫の各氏も駆けつけた。

得度式にさきだつて、ワット・パクナムから

贈られた仏像の開眼法要が、斎藤信義大本山總持寺監院の導師により當まれた。大本山總持寺にもワット・パクナムから奉戴した仏像が安置されている。これを日本へ奉迎する役目をつとめたのが黒田住職で、斎藤總持寺監院が導師をつとめたのには、そうした縁もあつた。

## パーリ語で出家乞う

### アンサを掛け黄衣を着用

開眼法要、得度式は、善光寺海外留学僧派遣育英会の常任理事でもある千葉県龍光寺住職・佐藤俊明氏（元總持寺副監院）の司会で進められた。道場が淨められ、斎藤監院によつて金色の仏像に点眼され、茶湯が献じられて、拈香法語が唱えられた。曹洞宗管長の祝辞を専使の梅田宗務所長が読み上げた。

引き続いて得度式に移る。本尊を背にして正

面に戒師のプラ・タム・パンヤー・ボーディ氏が坐り、その左手に内側を向いてプラ・パーウナー・コーソン・テーラ副住職が坐る。得度を受ける四人の子供たちは、淨髪し、白衣を着けて入堂。両親から受け取つた三衣を腕の上に頂戴して戒師の前へ進み、礼拝し、三度重ねて出家を乞う。

「アハン パンテー パッパッチャン ヤーチャーミ」

四人は声を揃えて、規則正しい口調で、覚えたパーリ語を一心に唱える。

「一切の苦を解脱し、涅槃を証得せんがために、導師らよ、御慈悲を垂れたまひて、我にこの黄衣を給いて、何とぞ我示出家せしめたまえ」という意味のことばを唱え終わると、戒師は、正式の坐法の一つである「横坐り」を許す。

戒師は得度志願者に向かつて、静かに語りかける。

「この沙弥の得度式は上座部仏教の得度式だ。小乗も大乗も同じ仏教にはかならない。沙弥になること、僧になることは、修行者となることだ。即ち十波羅蜜を行じることだ。この波羅蜜を積むことが、あなたたちの目的だ。精神が乱れると仏道を成ざることが出来ない。だから冥想する。それには、頭髪・体毛・爪・歯・皮膚の五相を観する。五相に対する不淨觀を修して



禪定に入り、執着を断ち、三昧の境に入つて解脱することが目的だ」

戒師は法衣の中からアンサ（肩衣）を取り出し、受戒者の首に掛ける。次いで三衣を授与され、黄衣着用を指示される。一ここで四人は別室に入つて白衣を脱ぎ、三衣を如法に被着する。

再び現われた四人は、右肩を顕わしたテーラワーダの沙弥の姿で戒師の前に立ち、こんどは三帰戒と十戒を授かるよう乞い、それを受ける。

「プツタンサラナン カツチャーミ（自ら仏に帰依し奉る）。タムマン サラナン カツチャーミ（自ら法に帰依し奉る）。サンカン サラナン カツチャーミ（自ら僧に帰依し奉る）」

これを三度くり返す。次いで十戒についても三帰戒と同じく戒師のあとに従つて三度唱え。三拝した後、四人は施者から蓮華を添えた鉢を受け取り、戒師の前へ進む。そして、戒師を自らの親教師（和尚）となるよう乞い、三衣

一鉢の儀式が行なわれ、問答があつて得度式が終わる。

## 歴史的な最初の得度式

戒師のプラ・タム・パンヤー・ボーデイ住職は参会の人々に次のようによく話した。

「上座部仏教の得度式は、たいへんむつかしい。三宝に帰依する方でなければ受けることが出来ない。今日の得度式は大へん盛大な儀式であり、そう簡単には出来ない。黒田住職もかつて私の寺で得度された。日本に上座部仏教は無いが本日、黒田住職と奥様は上座部仏教を日本に弘めたことになる。その最初の歴史的な得度式である」

斎藤総持寺監院は、

「御本師黒田白純老師が大本山總持寺に尽くされた歴史を承け継がれ、本日、タイの尊師を

お迎えして、ここに三宝が現成した。仏法僧の護持に一層精進させていただくことをお誓いしたい」と、善光寺との因縁をふり返りながら祝辞を述べた。

また、中村元博士は得度式から受けた感激を語りつつ、黒田住職の海外留学僧派遣育英会事業を高く称讃し、

「経済活動においては、日本はアジアや欧米諸国と交流しているが、精神面には目が向けられていない。その中で黒田老師が道を開かれた。さらに、このたび四人の御子息が同時にテーラワーダの得度を受けられたことは、仏教の国際交流の上で大きな事柄だ。これこそ精神面の尊い交流と思う」と述べた。